

## セッションⅠ 「文学のなかに身分感覚を読み解く」 【総括】

頼住光子\*

2011年7月9日に、本学教授岸本美緒先生のコーディネートによって、第13回国際日文学シンポジウム・セッションⅠ「文学のなかに身分感覚を読み解く」が開催された。岸本先生と同じく比較歴史学コースの教員である安成英樹先生、神田由築先生、そして台湾・東海大学の翁育瑄先生のそれぞれが、ご自身の研究分野に基づいてご発表をされ、その後、それに対する質疑、議論が行われた。当日、司会をつとめた立場からひとこと感想を申し述べさせていただきたい。

まず、全体テーマである「文学のなかに身分感覚を読み解く」という視点はとても興味深いものである。制度ではなくて、人々の間で漠然と共有されているが、なかなか時代や場所を異にする人間からは見通しがたい感覚に、文学の読解を通じてせまろうというのである。中国、フランス、日本とそれぞれの分野の文学作品や資料に対して精密な読解がほどこされ、身分感覚が抽出され、そのことの持つ意味が検討された。特に、文学においては、身分感覚をベースとしながらも、その感覚がある意味で裏切られるところに文学的なカタルシスがあると思われる。そのカタルシスの起こるメカニズムが、文学の筋立てや何気ないディテールの中に探求され、歴史資料の分析研究としてだけではなくて、文学を読み解く試みとしても私には、大変に意欲的なものであると感じられた。

一つ例を挙げると、岸本先生の御発表で言及された「岐路灯」の王中という「義僕」である。王

中は奴僕でありながら道徳性の高い、主人思いの立派な人間として描かれる。そしてその功績によって主人公の紹聞は王中の娘との結婚を決意し、「良賤間の結婚」になるが大事なのは結婚相手の賢さであると述べる。ただ、すぐそのあとで、自分の娘が主家の息子と結婚したら「道徳的」な王中自身が困るだろうということになり、結局は、娘は側室になった。ここでは、読者の側の身分感覚にゆさぶりがかけられ、緊張が走る。しかし、それは、身分感覚のある種の再確認というかたちで終息を迎える。その過程を通じて読者は、身分感覚のゆらぎと再生産を自ら味わうのである。

セッションでのそれぞれの御発表を伺わせていただき、私自身、いろいろな刺激を受けた。特に、日本思想を研究する立場として考えたのは、身分と超越的なもの、宗教的シンボルとの関わりである。日本思想の場合は、身分が多かれ少なかれ天皇（祭祀王）との親疎によって計られるところがあり、また浄穢が身分に絡むなど、宗教的なもの、超越的なものと身分との関連が問題になってくる。中国、フランスなどで、諸身分を分節する原理が、どのようなものなのか、何らかの超越的なものによって規定されているのかどうか。このあたりは、質疑の時に質問をしてみたかったが、フロアとの質疑・議論が盛況で司会が発言をする時間がなくなってしまった。今後機会があったら、この問題をぜひ先生方と議論してみたいと思う。参加者に対してとったアンケートの中には、個々の発表はたいへんに充実していたが、比較の面が少し弱かったのではないかという感想があった。たしか

\*お茶の水女子大学大学院教授

に、そのような面もあったのかもしれないが、とにかくごく限られた専門分野における個人研究に終始しがちな中であって、統一的関心から本学の教員を中心として発表と討論の場がもてたことは大きな一歩であったと思う。また、歴史学と私の専攻する日本倫理思想史とは、同一のものを研究対象としながら方法論の違いなどでこれまで研究面での協働をあまりしてこなかったが、今回のセッションをきっかけとして、学際的交流も深められたらと思う。

最後に、当日ご挨拶をくださった羽入学長、古瀬センター長、企画・運営・発表をしてくださった岸本先生、充実した御発表をしてくださった翁先生、神田先生、安成先生、運営補助をしてくださった事務局の矢越さん、そして私の拙い司会にもかかわらず熱心な議論をしてくださった参加者の皆様に心から感謝する。また、翁先生には本学の東日本大震災被災学生支援基金に御寄附を賜った。心からお礼申し上げます。